

A53c 県立ぐんま天文台と群馬大学・放送大学との連携の現状

吉岡一男(放送大)、岡崎 彰(群馬大)、田口 光、高橋英則、本田敏志、橋本 修(ぐんま天文台)、  
 初山隆志(元放送大)

県立ぐんま天文台と群馬大学・放送大学との連携の現状について報告する。1999年に県立ぐんま天文台がオープンして以来、同じ群馬県内にあり地理的に近いメリットを利用して、群馬大学および放送大学(群馬学習センター)は、相互交流を進めてきた。それは、大きくは次の3つのカテゴリーに分けられる。

1つは、研究面での交流である。県立ぐんま天文台の観測装置、とくに150cm反射鏡と65cm反射鏡を用いた観測が行われている。放送大学では2人がRV Tau型変光星を研究対象としてそれぞれ65cm反射鏡の小型低分散分光器(GCS)を用いて得られた低分散度のスペクトルに基づいた分類および150cm反射鏡のエッセル分光器(GAOES)を用いての化学組成解析を行い、修士号を取得している。また、現在、修士学生が系外惑星を持つ恒星の化学組成分析をGAOESを用いて行っている。また、群馬大学でも2人が食連星を研究対象として65cm反射鏡の光電測光器を用いて光度曲線を解析し、修士論文としている。さらに、昨年からは岡崎・吉岡とぐんま天文台スタッフに群馬大と放送大の修士学生・学部学生を加えて、Gray著の分光解析の教科書を輪講を始めた。

2つ目は、教育面での交流である。たとえば、群馬大学では教育学部理科専攻1・2年生の「総合演習」の一環として、ぐんま天文台を訪れて、観測施設の原理等の説明を受けている(隔年)。また、放送大学では2日間の集中型面接授業「観測天文学入門」の初日の夜にぐんま天文台を訪れて、スタッフから天文台の説明を受けたり、観望したりして参加学生の好評を得ている。

3つ目は放送大学特有の利用だが、多様な光学望遠鏡が設置されているぐんま天文台の特徴を利用して、何度か口ケに行き、放送大学の天文関係の放送授業の映像を得ている。